News Letter of Indus Civilization Studies

インダス・プロジェクト　ニュースレター

第１号

2007 年６月 20 日発行

ごあいさつ

このインダス・プロジェクト４月から本研究に移行しました。それに合わせてインダス・プロジェクトのニュースレターを作成することにしました。プロジェクトの最新の動向や研究成果をご紹介していきたいと考えています。プロジェクトメンバーのみなさんからのご寄稿も歓迎いたしますので、よろしくお願い申し上げます。

また、４月からプロジェクト研究員に森　若葉（言語学）に加えて大西正幸（言語学）、上杉彰紀（考古学）、寺村裕史（考古学）、園田　建（事務）が加わりました。合わせてよろしくお願い申し上げます。

プロジェクト全体会議のご報告

６月２・３日に地球研にてプロジェクトの全体会議が開催されました。インド・パキスタン・アメリカからの国外の研究者を交えて、これまでの研究成果の報告が行なわれるとともに、考古学・言語学・地質学各班から多くのプロジェクト・メンバーの方々が参加され、活発な議論が交わされました。研究報告の内容は以下の通りです。

■長田　俊樹（総合地球環境学研究所）
　研究プロジェクトの概要
■ M. Witzel（ハーヴァード大学）
　言語学からみたインダス文明
■ V. Shinde（デカン大学）
　ギラーワル遺跡およびファルマーナー遺跡の発掘調査
■ J.S. Kharakwal（ラージャスターン大学）
　カーンメール遺跡の発掘調査
■ F. Masih（パンジャーブ大学）
　チョーリスターン地方におけるインダス文明遺跡
　およびガンウェリワーラー遺跡の踏査成果
■ Q. Mallah（シャー・アブドゥル・ラティーフ大学）

会議終了後の記念撮影

シンド地方における近年の考古学調査
■ J.M. Kenoyer（ウィスコンシン大学）
　インダス文明研究の最近の動向と考古学における記録化の方法
■前杢　英明（広島大学）
　地球研・インダスプロジェクトにおける古環境調査の展望

インダス・プロジェクト講演会のご報告

さる６月 11 日に V. Shinde さんと J.M. Kenoyer さんによる講演が行われました。

Shinde さんはインドにおけるインダス文明研究の最新の成果についてお話しいただきました。未公表の遺跡の調査成果についても貴重な写真をもとにご紹介くださりました。

Kenoyer さんには長年にわたるインダス川流域のビーズに関する研究成果についてご発表いただきました。出土遺物の詳細な研究を出発点として、インダス文明社会におけるビーズの意義について論じられただけでなく、グジャラート州カーンバートに残る現代のビーズ工房の民族考古学調査の成果、さらにはインドのビーズ生産の影響を受けたと考えられるドイツの紅玉随製ビーズについてもお話しくださりました。

現地調査報告

2007 年４月のインド調査に参加して

上杉　彰紀

2007 年４月７日から５月９日までインドに行ってきました。調査の目的はハリアーナー州ロータク県に所在する遺跡の発掘への参加と、ラージャスターン州ウダイプルにあるラージャスターン大学に保管されるカーンメール遺跡（グジャラート州）の出土品の整理でした。

ハリアーナー州ではデカン大学のヴァサント・シンデー先生がファルマーナー遺跡、ギラーワル遺跡、ミタータル遺跡の３ヶ所で発掘を行ないました。いずれもロータク市内から車で１時間ほどの距離のところにあり、収穫を控えた小麦畑の直中に遺跡が忽然と姿を現すといった光景です。

調査成果の詳細は後日あらためて紹介したいと思いますが、いずれもインダス文明を考えるにあたって重要な遺跡で、貴重な体験を得ることができました。とはいいながらも、４月のインドは 40 度を超える酷暑で、発掘に参加した初日は不覚にも倒れてしまいました。デカン大学やロータク大学の学生は暑い中、日々進む発掘調査に興奮を抑えきらない様子で、彼らの姿に感動しつづけた毎日でした。

４月 20 日には長田先生がチョーリスターン砂漠のガンヴェリワーラー遺跡の調査視察を終えて合流され、４月 26 日までご一緒させていただきました。シンデ先生の計らいで、ラーキー・ガリー遺跡、ハーンシー遺跡、クナール遺跡、ベードワー遺跡、バナーワリー遺跡、ビルラーナー遺跡など、インダス文明の重要遺跡を見学することができました。特に７つのマウンドからなる巨大遺跡ラーキー・ガリーでは、遺跡の規模に驚く一方で、破壊が著しく進行している状況に目を覆う限りでした。1990 年代末に開始された発掘調査

遺跡周辺の収穫を待つコムギ

ギラーワル遺跡でのシンデ先生と長田先生

もすっかり止まってしまい、遺跡の概要すらわからないままに遺跡の破壊が進んでいっている状況でした。

私自身の作業としては、発掘そのものはシンデー先生以下学生さんたちにお任せし、出土した土器や遺物の記録を主として行なってきました。ロータク大学のゲストハウスに滞在し、朝目が覚めてから夜目が閉じるまで延々と写真撮影と実測を繰り返すという、常人ならぬ生活でしたが、はじめてハリアーナーのインダス遺跡の出土遺物を手にして学ぶことは大でした。

もうひとつハリアーナー州の調査で興味深く感じたのは、この大穀倉地帯ではコメの生産がほとんど行なわれていないということでした。地元の方にお伺いしたのですが、夏季の降雨がきわめて限られており、一部の水が豊富なところ以外では原則的にコメを作っていないとお聞きしました。コメは結婚などの儀礼のときにのみ食べるもので、日々の生活はコムギを中心としてオオムギや雑穀を食べているとのことです。かつて私が調査に参加していた東のウッタル・プラデーシュ州では冬の乾季にはコムギを、夏の雨季にはコメを栽培し、日々の食生活の中でも「コメを食べないと食べた気にならない」とまでいうのとは対照的で、まさにコメ世界からコムギ世界への変化がインドにあることを実感させられました。ハリアーナー州にあるクナール遺跡では前 3000 年ごろにコメが栽培されていたことをラクナウーにあるビルバル・サハーニー古植物学研究所のポーカリアー博士からお伺いしたことがありますが、インダス文明前後の時代にはコメ栽培がハリアーナー地域で行なわれていたのかどうか、あるいは現在の特別な穀物としての位置づけと似たような習慣があったのかどうか、インダス・プロジェクトで解明すべき問題であろうと思います。

さて、４月 29 日にはデリーに戻り、翌 30 日に飛行機でウダイプルへ移動。大学の近くにとってもらったアンクル・ホテルというところに滞在し、毎日大学まで通って作業をするという生活でした。カーンメール遺跡の発

掘調査を指揮するJ.S.カラクワール先生のご厚意にすっかり甘えてしまいましたが、おかげさまで有意義な日々を過ごすことができました。ここでの作業も基本的に遺跡出土の土器の記録化でしたが、カラクワール先生からの依頼で大学の学生に土器について講義することに。冷や汗を流しながらヒンディー語で講義をするという初めての体験でした。素直な学生たちに囲まれ、私にとっても有意義な時間でした。

グジャラート州とハリアーナー州というインダス遺跡が濃密に分布する地域の調査に参加し、これまで手に取って見ることすら叶わなかった貴重な資料に触れることができました。その中で得た多くの着想を今後の研究に十分に活かしていきたいと思います。

第１回　インダス文明研究会発表要旨

インダス文明の歴史的意義

上杉　彰紀

１　はじめに　南アジアにおける編年研究の現状

南アジアにおける銅石器時代・青銅器時代の編年は1920年代に発見されたインダス文明の年代を軸にしている。すなわち、相対編年の上ではインダス文明より古いか新しいか、実年代の上ではメソポタミア文明との併行関係をもとに提示された年代観より前か後かということである。1940年代以降には層位発掘手法と編年上の鍵となる特徴的な遺物（主に土器）の抽出が一般化し、インダス文明以前の文化の存在が各地で注目されるようになった。結果として、相対編年の設定と地域編年の充実が進められてきたが、そこにC-14年代測定が断片的ながら持ち込まれ、相対編年の深化よりも実年代観の把握に重点が置かれるようになったのである。

現在の傾向としては、C-14年代測定値の積極的な使用を挙げることができる。メヘルガル遺跡で発見された新石器文化が前7000年ごろまでさかのぼることを明らかにしたのはまさにC-14年代測定の結果である。

広大な地域を包括する南アジアでは、必ずしも遺跡の発掘調査数が少ない現状において時間軸・空間軸の双方で未明の部分が絶望的に多いことは止むを得ない。しかし、C-14年代測定値にしても、試料と遺構・遺物の関係が明記されなかったり、測定点数が数点に限定されるケースが多いことを考慮すると、充分な信頼に足るものとも思えない。時に数点の測定値に依拠して実年代が古いことが誇示されることがある。

いうまでもなく遺跡・地域の相対編年の充実と遺跡・地域相対編年間の整合を前提とした上で、理化学手法による年代測定値との対比による双方向の検証が求められる。南アジアの銅石器・青銅器時代の編年研究において求められるのは、理化学手法測定値の検証を可能とする地域相対編年の充実であろう。相対編年の充実によって、地域社会・文化の変遷の過程や地域間交流の様態の復元など、多くの課題を見出すことが可能になる。

本発表では上記の視点から、前４千年紀から前２千年紀前葉にかけての地域相対編年について現状の資料で把握しうる限りの仮説を提示することとしたい。

２　南アジア銅石器・青銅器時代の編年

上述のとおり、本発表では主に相対編年について検討するが、基本的に遺跡・地域間の併行関係は土器資料に基づいている。ただし、公表されている現有資料においては、明確に他地域からの搬入品として弁別できる例はほとんどなく、また器形も地域が変われば大きく変わるのが一般的であるので、比較の基準としてはあまり有効ではない（一部の場合を除く）。そこで併行関係の推定の上で注目できるのは彩文である。前４千年紀から前２千年紀のインド亜大陸北西部においては彩文土器が一般的にみられ、彩文の要素あるいは構成の中に、ある程度時間軸上で出現する時期を特定できる場合がある。また、地域を限定して出現する彩文もあり、偶然の類似の危険性を充分に考慮すれば、地域相対編年の併行関係を把握する上で有効性を発揮する。

■前４千年紀前半　地域社会・文化の形成

前４千年紀前半にさかのぼる遺跡は限られている。ここでは３つの地域を挙げたが、それぞれの地域の間では明確な交流関係を示す証拠がみられない。ただし、インダス平原のハークラー川流域と南部のアムリー遺跡では大形の甕に厚く泥漿を塗布する土器があり、地域間交流の結果かどうかは別として土器の用途・使用方法において共通性がみられる点は注目される。バローチスターン高原中央部においては、メヘルガル遺跡Ⅲ期が相当するが、ここで注目されるのは横向きの動物文を文様帯内に連続的に施す土器である。同様の配置をみせる動物文はバローチスターン高原北部のゴーマル・バンヌー地方（シェーリ・ハーン・タラカイ式土器）にもみられ、イラン高原との関係を示唆している。

■前４千年紀後半　地域社会・文化の拡大と地域間交流の発達

前４千年紀後半になると、決して遺跡数が充実するというわけではないながらも、各地域で複数の遺跡が確認されるようになる。各地域で独特な彩文土器様式が生み出され、器種・器形の点においても地域性が顕著であるが、彩文要素には地域間の交流を示す要素が認められる。

インダス平原南部のアムリー遺跡は独特な彩文様式と壺を特徴とした土器様式が発達する。パンジャーブ平原西部のハラッパー遺跡では前４千年紀中頃にラヴィ式土器が出現し、バローチスターン高原北部との関係を示す。バローチスターン高原北部のゴーマル・バンヌー地方では、多彩な彩文を施した直口鉢を特徴とするトチ・ゴーマル式土器が出現する。文様要素にはバローチスターン高原中央部や西のヘルマンド川流域、中央アジアとの共通性を示すものがあり、文様を介した広範な交流関係の存在を物語っている。バローチスターン高原中央部においてはケチ・ベーグ多色彩文土器様式がメヘルガル遺跡Ⅳ期に出現するが、メヘルガル遺跡Ⅴ期になると彩文の単純化が顕著に進む。バローチスターン高原南部においては 1920 年代よりナール遺跡が知られていたが、近年のドイツ隊による発掘調査によってその詳細が明らかにされつつある。直口鉢や短頸円筒壺、下膨れ状の扁球形広口短頸壺などの器種に赤・黄・緑の幾何学・動物・植物彩文を描くが、彩文要素の点ではバローチスターン高原北部・中央部などのの土器に共通する一方、その彩文手法（色の組み合わせを含む）はバローチスターン高原の他の地域にはみられないものであり、イラン高原東部（シャフリ･ソフタ遺跡）に共通する。バローチスターン高原南部のマクラーン地方においてはミリ・カラート遺跡やシャーヒー・トゥンプ遺跡の調査によってイラン高原東南部（バンプール遺跡）との直接的交流関係が明らかにされている。

大局的に俯瞰すると、この時期にはイラン高原や中央アジアとの交流関係をもちながらバローチスターン高原各地に核となる地域社会･文化が成立し、相互に交流ネットワークを発達させた状況を見出すことができるであろう。このことはイラン高原や中央アジアからの集団の移住や強力な文化伝播・影響を示すのではなく、むしろ各地域が直接的・間接的に連鎖状につながるなかで、人の移動、物資・情報の往来を可能とする仕組みが存在したことを物語っている。

東の平原部においてもこの時期に地域社会・文化が成立していた可能性が高いが、現状では充分に明らかになっているとはいいがたい。しかし注意しておくべきは、ハラッパー遺跡に示されるように、平原部においてもバローチスターン高原とのつながりが存在したことである。高原部と平原部の境界、すなわち生態系の変異を越えた交流ネットワークは、前３千年紀の社会を考える上で重要である。

■前３千年紀前葉　地域間交流の拡大と地域社会の再編　初期ハラッパー段階

インダス文明あるいはハラッパー文化の母胎がインダス平原に展開した先行文化に求められるとの主張から提起された「初期ハラッパー段階」の概念であるが、その提唱者である M.R. Mughal はメヘルガル遺跡Ⅰ期の新石器文化期以降の地域社会・文化の連続性を強調するあまりに、「初期ハラッパー段階」の意味合いが曖昧化しているのが現状である。むしろこの概念はインダス文明期の都市社会の成立に向かって社会が大きく変化する段階を表現するものとして用いられるべきであろう。この点からみると、前３千年紀前葉は前代に発達した地域社会と地域社会間ネットワークが大きくその性格を変容させ、都市社会の成立へと歩を進める時期として評価でき、まさに「初期ハラッパー段階」と呼ぶにふさわしい。

この時期の最大の特徴は平原部における地域社会・文化の顕在化である。シンド地方のコート・ディジー遺跡やパンジャーブ地方のハラッパー遺跡などはこの初期ハラッパー段階後半期には周壁をもつ都市的集落化している可能性が高く、またパンジャーブ地方東部においてもソーティ・シスワール式土器と呼ばれる地域色の強い彩文土器を特徴とする遺跡が増加する。

この初期ハラッパー段階の前半期においては、前代に引き続きバローチスターン高原各地で核となる地域がある。バローチスターン高原中央部においてはファイズ・ムハンマド式土器、「ウェット・ウェア」、ジョーブ式土偶などを特徴とする地域文化が成立し、西のヘルマンド川流域やイラン東部との関係を示す。この時期においては平原部との関係を明確に示す証拠はない。

一方、バローチスターン高原北部では前代のトチ･ゴーマル式土器から幾何学文や動物文などの彩文が欠落し、赤字黒色帯を特徴とする単純な彩文を特徴とする土器様式が成立する。この単純な彩文土器様式はシンド地方のコート･ディジー遺跡で最初に確認された「コート･ディジー式土器」と強い類似性を示していることから、同じ「コート・ディジー式土器」の名称で呼ばれるが、器種構成や器形の点で違いが顕著であり、「北方型コート・ディジー式土器」と「南方型コート・ディジー式土器」に分けて考えるべきである。北方型コート・ディジー式土器には幾何学文を描く鍔付広口短頸壺やゴーマル式土偶が特徴的であるが、南方型コート・ディジー式土器にはこれらの要素はみられない。

いずれにしてもここで注目すべきは、前代においてバローチスターン高原やイラン高原との関わりを有していたゴーマル・バンヌー地方が伝統的な彩文土器を排して平原部との関係を強化したことである。無論、西方との交流が途絶えたわけではないだろうが、社会の表象としての物質文化の点では、前代までの様態から大きく変化

したことを示している。

北方型コート・ディジー式土器に伴うゴーマル式土偶はパンジャーブ地方西部のハラッパー遺跡においても出土しており、ゴーマル・バンヌー地方とパンジャーブ地方西部が土偶を介して関係を有していたことがわかる。また、北方型コート・ディジー式土器はパンジャーブ平原北縁部のポトワール地方やヒマーラヤ山中の新石器文化の遺跡においても出土しており、北方地域と交流関係を有していたことがわかる。

パンジャーブ地方東部になると、土器様式は大きく変わり、ソーティ・シスワール式土器が分布する。ソーティ・シスワール式土器に関しては、公表された資料が限られていることから実態が判然としない部分が多いが、口頸部から肩部にかけて幅広く黒く塗り潰した壺や、獣角・ピーパル文を著しく変形させた特異な文様を描く壺が特徴的である。内面に櫛描平行沈線文をめぐらす広口鉢はパンジャーブ西部においてもみられるが、とりわけ波状に施される櫛描併行沈線文は施される器種・器形が異なるものの、ゴーマル地方やパンジャーブ地方西部においても広く見出され、これらの地域の間の交流関係を示していると考えられる。

このように初期ハラッパー段階前半期には大きく地域間の関係が変わるが、前代の地域間関係を継承している部分もある。いずれにせよ平原部へと地域間交流の中心が移動しつつあることは確かであり、インダス文明期の平原部を中心とした都市社会への転換期と位置づけることができる。

初期ハラッパー段階の後半期になると、前半期にはみられなかったシンド地方とバローチスターン高原中央部の交流が顕在化する。バローチスターン高原ではファイズ・ムハンマド式土器の系譜が潜在化し、赤字黒色彩文土器が目立つようになる。また、バローチスターン高原中央部に起源する「ウェット・ウェア」がバローチスターン高原だけでなく、平原部にも広く分布することも重要である。このほかバローチスターン高原とヘルマンド川流域には様式化した植物文を描く浅鉢があり、特定の土器に表象される地域間交流は前代よりも重層化する。

グジャラート地方北部でもシンド地方からバローチスターン高原南部と関係する土器が出土しており、活発な人の移動または交流を看て取ることができる。特に埋葬に伴って西方との関係を示す土器が出土する点は注目される。

バローチスターン高原南部のマクラーン地方は依然としてイラン高原東南部との強い関係を示すが、メソポタミア起源のビベルド・リム・ボウルの出土は興味深い。イラン高原とメソポタミアとの交流関係がマクラーン地方にまで及んでいることを示している。おそらく初期ハラッパー段階後半期からインダス文明期初頭の時期にマクラーン地方もインダス文明社会のシステムに組み込まれた可能性が高いが、インダス文明社会にとってマクラーン地方はイラン高原東南部との交流の上で戦略的重要性を有していたのであろう。ただし、一方でイラン高原東南部とつながる文化伝統がインダス文明期にも存続していたであろうことは、次代のクッリ文化の成立を考える上で重要である。

■前３千年紀中葉　地域統合とインダス文明社会の成立

重層化した地域間交流の基盤の上にインダス文明社会が成立することになるが、インダス文明社会を特徴づける諸々の器物の個別的な出自は必ずしも明確ではない。インダス式印章は初期ハラッパー段階に流行したイラン高原系の幾何学文印章とは大きく異なり、まさにインダス文明社会独自の器物であるが、インダス文字や一角獣を中心とする図像の出現過程は初期ハラッパー段階にさかのぼることが難しい状況にある。近年のハラッパー遺跡の調査では初期ハラッパー段階後半期を中心とする２期からインダス式印章同様のゾウを刻んだ方形印章の破片が報告されており、初期ハラッパー段階にインダス式印章の萌芽が認められる可能性はあるが、それでもなおインダス式印章がインダス文明期になって突如として出現する感は否めない。

同様のことはハラッパー式土器にもいえる。何をもってハラッパー式土器というかきわめて難しいところであるが、大形甕を中心に描かれる独特の彩文を手掛りにすれば、その彩文様式は初期ハラッパー段階の各地の彩文様式と大きく様変わりする。鳥（クジャク）とピーパル（インドボダイジュ）文、水草文などを組み合わせて描く肩部文様帯と、魚鱗文・交差円文を描く胴部文様帯からなるが、要素を個別的にみると初期ハラッパー段階にさかのぼる。しかし、その組み合わせおよび配置はハラッパー式土器特有であり、このことから考えると初期ハラッパー段階に出自する諸々の文様を意図的に選択し、再構成して彩文様式を創出していることが窺われる。

土器と印章からみると、ハラッパー文化は既存の文化要素を統合して、新たな様式を生み出すことによって成立した可能性が高い。部分をみればハラッパー文化は前代からの連続性で理解することもできるが、本質的には前代の諸文化とは異なった新たな社会・文化（厳密にいえば新たな社会システム）の成立とみなすべきであろう。この点にこそ、都市というそれまでにはなかった空間を擁し、広大な地域を結びつけた都市社会の成立の姿を見

出すことができる。

ハラッパー文化の器物は、北はラピスラズリの原産地バダフシャン地方にあるショールトゥガイ遺跡から、南はアラビア海に面するグジャラート地方、西はイラン東南部への通廊マクラーン地方、東はパンジャーブ地方東部にまで広がるが、各地域へのハラッパー文化の拡散の前後関係は今後の検討課題である。土器の型式学的検討によれば、バダフシャン地方やマクラーン地方には比較的早い段階に展開している可能性があるが、グジャラート地方はインダス文明期の中でも新しい段階に遺跡が増加する。パンジャーブ地方東部については、ソーティ・シスワール式土器と存続期間およびハラッパー文化との時期的関係が判然とせず、初期ハラッパー段階に位置づけられているカーリーバンガン遺跡Ⅰ期を純粋にハラッパー文化以前とみなしうるのかどうかわからない。

おそらくハラッパー文化の拡散には一定の時間幅が存在する可能性が高いが、その実態については各遺跡の出土遺物の型式学的検討と C-14 年代測定値の蓄積を俟たざるを得ないのが現状である。

いずれにせよ、インダス文明社会は初期ハラッパー段階において各地に展開した地域社会を統合することによって成立した社会システムである。広域的にみると、初期ハラッパー段階まではイラン高原の縁辺部にあった地域社会が、広域地域間交流の再編を行ない、中心性を強化した結果である。イラン高原との交流を切り離してはインダス文明社会の成立は説明できないし、文明社会の基盤を形成した地域社会の展開を無視しても理解はできない。前４千年紀後半のメソポタミア文明社会の成立とそれに伴う広域地域間交流のネットワークの再編にインダス川流域周辺の地域社会が適応した結果がインダス文明社会の成立と考えたい。

■前３千年紀後葉　西南アジア世界の再編とインダス文明社会の展開

前３千年紀後葉になると、イラン高原を中心とする地域間交流ネットワークの再編が生じる。ペルシャ湾岸の重要性の増大と中央アジア南部におけるバクトリア・マルギアナ考古文化複合（Bactria-Margiana Archaeological Complex、以下 BMAC）の成立である。ペルシャ湾岸地域においてはディルムン式印章を特徴とするバールバール文化が発達し、海上交易を担うようになる。グジャラート地方のロータル遺跡では湾岸式印章が出土し、アラビア半島でもインダス文明系の遺物が出土している。海洋交易の活発化を出土遺物にみることができるのはこの時期のことである。

一方、BMAC は城塞都市と独自の印章、そして発達した金属器を特徴とする文化で、一つにはカスピ海東南部（ナマーズガⅣ期文化）からの系譜、もう一つにはメソポタミア、アナトリア方面にも通じる図像の系譜がある。BMAC 成立の過程は必ずしも明らかではないが、BMAC 系遺物がイラン高原からバローチスターン高原、そしてインダス平原にまで散在的に分布する状況は注目される。バローチスターン高原ではメーヒー遺跡、ナウシャロー遺跡Ⅳ期、インダス平原ではモヘンジョ・ダロ遺跡およびハラッパー遺跡、さらにインダス平原東側のアラヴァリ山脈でも出土している。これらの散在的な分布を時間軸上において整理する試みは今後の課題であるが、インダス文明後半期に併行する時期のことである可能性が高く、イラン高原を舞台とする社会再編がインダス文明にも少なからず影響を与えたことは確実である。

こうしたイラン高原の社会再編に関連して重要なのは、同じくインダス文明後半期にバローチスターン高原南部を中心に成立・展開したクッリ文化である。この文化は古くからその存在が知られていたが、近年の発掘調査および骨董品市場への流出品によっておぼろげながらにその実態が把握できるようになってきた。重要なのは、クッリ文化がハラッパー文化、イラン高原東南部、BMAC と接点を有していたことである。また、クッリ文化を特徴づけるクッリ式土器の図像を刻んだ円筒印章がスーサ遺跡でも出土していることも注目される。

この時期、インダス平原においてはクッリ式土器の影響を受けた彩文を描く土器や、バローチスターン高原の先ハラッパー文化に由来する幾何学文を描く土器が出現する。インダス文明前半期のハラッパー式土器の彩文様式が崩れて大きく変容するのと軌を一にする現象であり、ハラッパー文化そのものあるいはハラッパー文化と周辺地域との関係の変化を反映している可能性が高い。

インダス文明終末期に近いところに位置づけられるジューカル文化にはインダス式印章ではなくイラン系の幾何学文を刻んだ土製印章が現れる。こうしたイラン高原系の土製印章は、おおむね同時期からインダス文明終末後に位置づけられるピーラク遺跡でも出土しており、インダス式印章そのものさえも一部の地域では用いられなくなってきたことを示している。

イラン高原の社会再編と交流ネットワークの変容に伴って、インダス文明社会もまた変容を余儀なくされ、次第に西アジアから中央アジア、そして南アジアに広がる広域交流ネットワークの中でその存在が弱まっていった可能性がきわめて高い。そうした状況の中でグジャラート地方やパンジャーブ地方東部で遺跡が増加する現象はきわめて示唆的である。文明社会の中心が東方に移転したかのごとくであるが、広く西南アジア世界の中で

みればインダス文明社会が地方化・周縁化していく状況を物語っているのであろう。こうしたインダス文明は段階的あるいは漸移的に衰退あるいは解体の途を辿っていくことになる。

■前2千年紀前葉　インダス文明社会の解体と地域社会・文化の顕在化

上述のような契機のもとでインダス文明社会は衰退し、狭域型の地域社会へと解体していくことになる。パンジャーブ平原西部のH墓地文化、同東部のバーラー文化、ミタータルⅡB期文化、ガンジス＝ジャムナー・ドアーブ地方の赭色土器文化、アラヴァリ山脈のアーハール文化、グジャラート地方のラングプルⅡB・ⅡC文化、輝赤色土器文化、バローチスターン高原中央部のピーラク文化などが列挙されるが、これらの文化群の厳密な併行関係およびハラッパー文化との関係は今後の調査・研究の進展に俟たざるを得ないところが大きい。

これらの地域文化群を一括して後期ハラッパー文化として位置づけ、ハラッパー文化からの連続的移行を強調する論調が昨今の研究の大勢を占めるが、それぞれの文化の内容は土器資料にみる限り大きく異なっている。隣接文化間では類似度の高い要素が認められるものの、全体としてはそれぞれに異なった特徴を有しており、さらにハラッパー式土器の要素、各地の先ハラッパー文化期の要素が入り混じっている。そこに中央アジア、バローチスターン高原に散見される要素もまた入り込んでおり、インダス文明後半期よりもさらに複雑な文化系統間の交渉が認められるのである。筆者は、一つの社会・文化に統合されることのない、文明社会解体後の様相を緩やかな地域間交流の時代と呼んでいるが、その内実はきわめて複雑かつ錯綜的である可能性が高い。表現としては逆説的であるが、多方向の集団の移動・交流が活発化したのであろう。

この時期はインド・アーリア語族の移住問題と関係して、考古学の側からも積極的な発言が行なわれてきたが、物質文化には断絶を伴う急激な変化はみられない。とはいうものの、各地でそれまでとは異なる要素が出現することも確かであり、単純にハラッパー文化からの連続性のみで説明することは不可能である。いまなお変化の実体は判然としないところが多く、連続性と非連続性からなる変化のダイナミズムの解明は今後の課題である。

3　課題と展望

編年研究は時間・空間軸上における物質文化の変化を理解する上で欠くことのできない研究分野である。C-14 年代測定はおおよその実年代を把握する上で有効な方法であることはいうまでもないが、それによって物質文化の変化そのものが明らかにできるわけではない。型式学的研究は細分主義に陥る危険性をもつが、物質文化の変化を復元する上で重要である。いかに変化を把捉し、時間・空間軸上に位置づけていくかが求められるところである。

南アジアの銅石器時代および青銅器時代は、イラン高原の縁辺部で形成された地域社会が、いかにしてメソポタミアからイランに連なる広域ネットワークを媒介としてインダス文明社会の成立に到達するか、まさにその過程である。インダス文明外来説あるいはインダス文明自生説の両極端に捕らわれることなく、地域社会と地域間交流のネットワークのそれぞれの変化、あるいは双方の関係性の変化を捉えることこそが、インダス文明社会の形成過程やその特質を理解する上で重要である。

また、型式学的分析を軸とした編年研究の進展によって、従来安定した社会として描かれてきたインダス文明社会像も大きく変わる可能性が大である。イラン高原を中心とする交流ネットワークの再編に伴って、インダス文明社会も変化を余儀なくされ、結果としてインダス文明社会の存立基盤が失われることになったと推測される。それは都市を基盤とする社会システムの衰退であり解体である。文明滅亡論的にインダス文明社会の衰退を捉えるのではなく、社会変容･再編の視点からその衰退･解体の過程を位置づけていく必要がある。この過程においてもまた地域間交流の様態が大きな役割を果たしていると考えられる。

物質文化の変化を捉える方法としての編年研究の深化は今後もなお重要な研究課題である。

インダス文明研究会のご案内

インダス文明の基本的な事柄に関する勉強会を定期的に開催することとなりました。ご関心のある方は奮ってご参加くださりますよう、お願い申し上げます。各回とも地球研・セミナー室で 15:00 から開催する予定にしています。ただし、６月 28 日は午前中 10:30 からの予定です。

発表予定

第１回　５月 31 日
　　上杉　彰紀　「インダス文明の歴史的展開」
第２回　６月７日
　　小磯　学　「インダス式印章について」
第３回　６月 11 日
　　J.M. ケノイヤー／ V. シンデ　特別講演

第４回　６月 21 日
　　寺村　裕史　「考古学 GIS の基礎（１）」
第５回　６月 28 日
　　上杉　彰紀　「インダス文明の編年」
第６回　７月 12 日
　　小磯　学　「インダス文明の装身具」
第７回　７月 19 日
　　寺村　裕史　「考古学 GIS の基礎（２）」
第８回　７月 26 日
　　長田俊樹　「インダス文字解読研究の現状」

インダス・プロジェクトの新刊案内

■ Occasional Paper 2　Linguistics, Archaeology and the Human Past. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, 2007.

1　Asko Parpola　Seal impressions on the clay tags from Lothal: A re-analysis. pp. 1-12.
2　Asko Parpola, Dorian Fuller and Nocole Boivin　Comments on the incised stone axe found in Tamil Nadu in 2006 and the claim that it contains an inscription in the classical Indus script. pp. 13-19.
3　Jeewan Singh Kharakwal, Y.S. Rawat and Toshiki Osada　Kanmer: A Harappan site in Kachchh, Gujarat, India. pp. 21-46.
4　P.P. Joglekar　Report of the faunal remains recovered from Kanmer, Kachchh, Gujarat, during the first season (2005-06). pp. 47-76.
Appendix 1　Hasmukh Seth, L.C. Patel and Bhimraj Varhat　Harappan sites in Gujarat. pp. 77-110.
Appendix 2　Suresh Meena, Rajesh Meena and Sameer Vyas　Excavated sites in the Greater Indus Valley. pp. 111-125.

■ Toshiki Osada ed. Indus Civilization: Text and Context. Manohar, New Delhi, 2006.

Toshiki Osada　Introduction. pp. 7-13.
1　Jeewan Singh Kharakwal　Indus Civilization: An Overview. pp. 15-59.
2　Michael Witzel　Central Asian Roots and Acculturation in South Asia: Linguistic and Archaeological Evidence from Western Central Asia, the Hindukush and Northwestern South Asia for Early Indo-Aryan Language and Religion. pp. 61-185.
3　Yo-ichiro Sato　Rice and the Indo Civilization. pp. 187-188.
Bibliography. pp.189-269.

■近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩

「クッリ式土器とその意義–岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて–」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21、2007 年、15 ～ 50 頁.

■上杉彰紀・近藤英夫

「南アジア銅石器時代・青銅器時代の編年」『日本西アジア考古学会十周年記念連続シンポジウム　西アジア考古学の編年–日本の考古学調査団からのアプローチ–』日本西アジア考古学会、2007 年、80 ～ 85 頁.

■上杉彰紀・小茄子川歩

「インダス文明期の地域社会構造に関する一考察–クッリ式土器を手掛りとして–」『日本西アジア考古学会第 12 回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、2007 年、25 ～ 28 頁.

■山崎元一・小西正捷編

『南アジア史１　先史・古代』山川出版社、２００７年.
小磯　学「第１章–１　南アジア最初の住人たち」17 ～ 24 頁.
上杉彰紀「第１章–３　歴史時代」41 ～ 49 頁.
藤井正人「第２章　ヴェーダ時代の宗教・政治・社会」57 ～ 85 頁.

■ Teramura, Hirofumi and Takao Uno

Spatial Analysis of Harappan Urban Settlements. Ancient Asia, Vol. 1, Society of South Asian Archaeology, Pune. 2006. pp. 73-79.

■長田俊樹・宇野隆夫・寺村裕史

「GIS を用いたインダス文明都市の分布研究」『GIS を基盤とする考古・歴史民俗・環境情報の高度連携研究–ユーラシア集落・都市の営みと環境の関わりを中心として–』大学共同利用機関法人・人間文化研究機構、2007 年、85 ～ 93 頁.

編集後記

４月よりプロジェクトも本格的に動き始めました。プロジェクトが実り多きものとなりますよう、メンバーの皆様からのご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

また、このニュースレターでは皆様からのご寄稿をお待ちしております。直接インダス文明に関わらないものであってもかまいませんので、よろしくお願いいたします。ご意見等もお待ちしております。